

## 書 評

---

### Cristina Giorcelli and Paula Rabinowitz (eds.), *Exchanging Clothes: Habits of Being 2*

Minneapolis: University of Minnesota Press, 2012. xxii + 265 pp.

ISBN: 978-0-8166-7807-5

本田 安都子

本書は、衣服に関する学術論文をまとめた4巻組のシリーズ *Habits of Being* の第2巻である。このシリーズでは、イタリアで1995年以来長年にわたって刊行されている論集 *Abito e Identità* (『ドレスとアイデンティティ』) から厳選された論文(多くは原文のイタリア語から英訳したもの)を再掲載している。*Habits of Being* シリーズの第2巻にあたる本書 *Exchanging Clothes* は、そのタイトルが示すように、「交換」や「流通」という言葉をキーワードにしてまとめられた13編の論文からなる。編者のCristina GiorcelliとPaula Rabinowitzは共にアメリカ文学者であるが、ここに集められた論文は、ホメロスやウェルギリウスなどギリシャやローマの古典詩における衣服を論じたAnne Hollanderによる“Orbits of Power”(第4章)や、アメリカの女性ジャーナリストNellie Blyが19世紀末に世界一周旅行をした際の旅装について論じたCristina Scatamacchiaによる“Travelling Light”(第6章)、更には、アメリカの古着チェーン店Savers Thrift Department Storeにおける経営展開、および消費者動向を調べたKatalin Medvedevによる“It Is a Garage Sale at Savers Every Day”(第13章)というように、対象となっている時代や地域のみならず、学術的関心も文学から歴史学、社会学などに至るまで非常に多岐にわたっている。このことは、衣服というテーマが研究対象として広がりのある題材であることを示している。

序論の冒頭においてラビノウィッツは、本書のテーマである「交換」と「流通」を寓意的に表す展示として、2010年5月10日から14日にかけて、ニュー

ヨークのブライアント公園に設置された Kate Gilmore によるインスタレーション *Walk the Walk* を紹介している。この野外展示では、周りをオフィスビルに囲まれた公園の一角に置かれた高さ 8 フィート、10 フィート四方の「キャットウォーク」の上で、ギルモアに雇われた 7 人の若い女性達がせわしなく動き回る。彼女らの身にまとっている同一の服装—鮮やかな黄色のシフトドレス、ピンクのカーディガン、アイボリーのパンプス—は、オフィス・ワーカー向けのオンラインショップでギルモアが購入したものである。それらの衣装を身につけたモデル達が歩き回るその展示空間は、あたかもオフィスの一室の光景を凝縮して再現しているかのようにも見える。狭い「オフィス」空間をぐるぐると歩き続ける彼女達の姿は、市場の中で貨幣と「交換」され、売り手から買い手の間で「流通」する「商品」を連想させるとラビノウィッツは述べる。更に興味深いことに、このインスタレーションは、いかに衣服がそれを身にまとう人物のアイデンティティの指標となっているかということも同時に表している。“Exchanging clothes shapes identity” (14) とラビノウィッツは序論の結びで述べているが、衣服とアイデンティティの関係は、この論集に収められている論考の多くに共通する視点である。以下、評者にとって特に興味深かった論考を概説していく。

ジョルチェッリによる “Sheer Luxury” (第 5 章) は、ケイト・ショパンの短編 “A Pair of Silk Stockings” (1897) を論じている。ショパンの代表作『目覚め』(1899) の 2 年前に発表されたこの小品は、男性の性的幻想を喚起しうるアイテムである絹のストッキングが、平凡な主婦にとっても、日常の自分とは違う自己を作り出す誘惑的アイテムとなりうることを物語っていると論者は主張する。苦しい家計を切り盛りしながら、家事に育児に忙しい日々を送るある主婦が、偶然にも 15 ドルという「大金」を手に入れる。そのカネを家族のために使おうとデパートに行くものの、溢れかえるほどの商品の渦を前に呆然としてしまった彼女は、何故か絹のストッキングを買ってしまう。普段は手が出ないような高級品を身につけたその主婦は、自分が上流階級の夫人に変身したように感じ、レストランでの食事や演劇鑑賞など、「新しい自分」にふさわしい贅沢を残りのカネを使って満喫する。この物語はまさに、身につけるものによって新たなアイデンティティを獲得する話といえる。同時にこの物語は、カネと交換して手に入れた新たな自己は、一過性のものであり、カネが尽きればまた日常に戻らなければならないことも暗示している点を論者は見逃していない。

ショパンの短編における衣服とアイデンティティの関連は、儚い夢のような一過性ものとして終わってしまうが、19 世紀末に世界一周旅行記を新聞連載し

て人気を博したルポライター、ネリー・ブライは、マスメディアを介して世界旅行時の自身の旅行着姿を世間に「流通」させることにより、「新しい女」という自己像を確立した人物である。第6章“Travelling Light”においてスカタマッキアは、いかにしてブライが装身具を使って、世間に示したい自己イメージを戦略的にメディアの中で形作っていったのか論じている。特に、ブライの旅行鞆は、その小ささゆえに機動性に優れ、束縛されない自由なイメージを彼女に付与した。評者にとって興味深かったのは、ブライの旅行鞆が、家庭の領域の外に出るといふ、当時の女性像からは逸脱するようなイメージを作ると同時に、ヴィクトリア朝的性規範には従順である女性像をも示していたという論者の指摘である。まるで医者か助産師の鞆のように見えるブライの旅行鞆が、彼女の職業婦人という側面を演出する一方で、その固く閉じられた鞆の口は、彼女が性的にあけすけではないことを暗示していたと論者は指摘する。男性達に占められた公的な場に進出する先進的な「新しい女」であると同時に、伝統的価値観に従順な女性であることをも示すために戦略的に装身具を使い、公的・私的領域の合間に自己の居場所を模索したブライの人気は、このような“unique interplay of tradition and innovation” (109) にあったのだという論者の視点は興味深い。

Alisia Grace Chase の“Like Their First Pair of High-Heeled Shoes” (第7章) は、オードリー・ヘプバーン主演の映画『麗しのサブリナ』(1954) を題材に、映画製作規定に縛られた当時のハリウッド映画界において、いかに服装というものが、検閲制度によって抑圧されたメッセージをスクリーン上で暗示するための道具として機能していたのかについて論じている。論者は、無垢なアメリカ人少女がヨーロッパへ行き、そこで経験を積んで大人の女へと変身するという、アメリカ的な類型的物語を『麗しのサブリナ』の中に見出す。主人公サブリナの「経験」は、映画の中では決して明示されず、論者は、サブリナの服装や髪形、身につけるアクセサリ、果てはペットのプードルのトリミングにまで至る服飾描写の細部に隠されたメッセージを丹念に拾い上げ、丁寧に読み解いていく。その様は、さながら暗号ゲームのようであり、その暗号は、映画公開時のアメリカ社会では、多くの観賞者達—特に女性達—によって共有されたものであった。しかしながら、ファッションが時代の変化と共に変遷していくように、ある時代において特定のファッションに付与されていた意味合いも、時の流れと共に消失してしまう。その証拠として論者は、1954年のオリジナル版においては、主人公の性的成長を暗示するサインとして使われていたパリのファッションが、1995年のリメイク版では単なるジョークの種として使われて

いるに過ぎない点を挙げている。論者は結びの中で、“when images of Britney Spears’s obviously experienced belly fly across the globe in a matter of milliseconds, it is difficult to imagine what sorts of fashion could supposedly represent sexual liberation or the loss of one’s virginity” (139) と述べているが、この論考は、ファッションを題材にしつつも、アメリカ文学における類型的テーマともいえる「無垢」という主題が、現在のアメリカ社会の中でも未だに有効なテーマであるのかどうか、再考を促すような一編であると言える。

ラビノウイツによる“Slips of the Tongue”（第9章）は、1950年代に数多く出版されたレズビアン大衆小説が、まだ独自のサブカルチャーを有していなかった当時の女性同性愛者達にとって、レズビアンとしての服の着方や身の振る舞い方などを教えてくれるハウツー本として機能するだけでなく、アンダーソンの「想像の共同体」さながらに、第二次世界大戦後間もない時代のアメリカの各地に分散し、独自のコミュニティを形成するに至らなかった女性同性愛者達の間、レズビアン共同体の意識を育む場としてもこのパルプ・フィクションのジャンルが機能したのだと主張する。ラビノウイツの論考が評者にとって興味深かったのは、レズビアン大衆小説というジャンルが、当時の社会でどのように機能していたか論ずるといふ文化研究的側面を保ちつつも、個々の小説のテキスト分析も怠らないという分析視点のバランスの良さである。ラビノウイツのテキスト分析で面白いのは、レズビアン大衆小説が、地理的、社会階層的に分断された当時の女性同性愛者達の間で「流通」することによって、彼女達の中に共同体的意識が芽生え、想像的に互いと結び付いたように、この時代に流布したレズビアン物語内部においても、社会階層や年齢層などによって分断され、交わるはずのない女性同性愛者達が、ある舞台設定—デパートの洋服売り場と美術学校のヌード・スケッチ教室—に足を踏み入れることによって繋がっていくという点である。他の女性の体を盗み見ても決して咎められることのないこれらの舞台装置において、通常であれば出会うはずのない女性達が互いに視線を「交換」し、やがて精神的、肉体的に結びついていく。現実世界の女性同性愛者達同様、小説内部の若い登場人物達も、手本となる年上の女性同性愛者の手ほどきを受け、レズビアンとしてどのように着こなし、どのように振る舞うべきかというノウハウを一つずつ学んでいく。このように、ラビノウイツの論考は、本書のテーマである「交換」や「流通」をキーワードに、いかにして衣服を介した共同体形成が、物語世界および現実世界の女性同性愛者達の間で展開されていったかを紐解いていく、大変興味深い一編となっている。

最後に紹介するメドヴェージェフの民族誌学的論考 “It Is a Garage Sale at Savers Every Day” (第13章) は、「交換」や「流通」というテーマを通して衣服について論ずるといふ本論集の最後を飾るにふさわしい一編となっている。

「交換」や「流通」という言葉から「消費社会」という言葉を連想するのは容易い。衣服が家庭で作られるのではなく、工場で大量生産されることが当たり前となった現代において、衣服と消費文化は切っても切れない関係にあると言える。更には、本書に収録された論考の多くで繰り返し指摘されているように、新しい衣服を身につけることが、新しい自己を形成することに繋がるのであれば、自己イメージの刷新の度に新たな衣服が必要となることは必至であろう。序論でラビノウィッツが “We are the accessories of our own desire” (7) と述べるように、我々の欲望に歯止めをかけることは難しい。衣服を交換するように、なりたい自己イメージも取り換え可能であるならば、その欲望する自己イメージが完成することはないだろう。欲望は欲望を生み、いつしか自分自身がその欲望に隷属し、「新たなファッション」＝「新たな自己」を求めて服を買い漁る。メドヴェージェフの論考は、衣服を介したそのような、ある種「不毛」ともいえる現代社会の自己探求に対するアンチテーゼを、リサイクル・チェーン店「セイバーズ」の顧客に対して行った意識調査から浮かび上がらせている。論者の聴き取り調査で明らかになったのは、常連客達が必ずしも儉約するためだけにこのリサイクル・チェーン店に足を運んでいるのではないということであった。「セイバーズ」に足繁く通うのは、学生や低所得者層のみならず、経済的には潤っているはずの白人中産階級に属する人々であった。彼ら中産階級の常連客達が繰り返し強調するのは、「セイバーズ」に行くことは、大量生産や大量消費を是とする現代の消費文化に対する抵抗に繋がるのだという視点であった。評者にとって特に新鮮だったのは、「セイバーズ」の顧客の多くが、古着の美点として、他人がすでに袖を通したものであること、つまり、服に「歴史」があることを上げている点であった。そのような服の「歴史」が、工場で作られたばかりの時点では「無名」の存在であった既製服に唯一無二の「個性」を与えているのだと彼らは言う。これは明らかに、大量生産、大量消費社会における消費行動に抗する視点である。これまでの論考の多くでは、衣服そのものがそれを身につける者のアイデンティティを形作っていたが、メドヴェージェフの論考では、別の形での衣服とアイデンティティ形成の関係が垣間見える点が非常に興味深い。「セイバーズ」の顧客は、そこで服を買うという行為を介して、大量消費社会に反抗する自己像を演出しているのだ。

以上、*Exchanging Clothes* に収録された13編の論文から数編を取り上げ、そ

の概要について評したが、これら数本の論文を並べただけでも、衣服を論ずる本書の視点の幅広さが十分に窺える。今回取り上げた論考以外にも、近現代西洋社会におけるネクタイの社会的意味の変遷を追った Nello Barile の歴史的論考“*A Knot to Unite*” (第 11 章) や、アルジェリア北西部に位置する都市トレムセンにおける花嫁衣装のトレンドの変遷を社会学的に追跡した Chafika Dib-Marouf の “*Ornaments and Feminine Clothing Tradition in Algeria; or, The Identity Quest*” (第 12 章) などが収録されており、この論集を手にするだけで、いかに衣服というテーマが幅広い学際的関心の元に研究されるべき題材であるかが痛感される。このシリーズの論者の多くは、ここに収められた論文で初めて衣服に関する論考に着手したのだが、研究を続ける内にそのテーマ性の幅広さに魅了されていったとラビノウィッツは序論の中で述べている。このことは、本書の読者の多くにも当てはまることではないかと評者は思う。*Exchanging Clothes* は、衣服研究初心者の読者でも、その中で展開される様々な視点から論じられる衣服に関する研究成果に目を通すことによって、この分野への知的関心を深めていくことのできる入門的良書であると言える。